

樺太アイノに關する人類學的探究紀行(上)

清野謙次

はしがき

僕は數年來日本の各地方に互つて石器時代(先史時代)と古墳時代(原史時代)の古人骨を蒐集しつゝある、其數今日に於て殆んど六百體に達せんとする。此人骨を現代日本人骨と比較研究すれば神武天皇以前に如何なる體質の人體が日本國に生存し、神武天皇から奈良朝迄に如何に體質的の變化を受けて現代に達したか、知れる譯である。

此研究、即現代日本人の起原に關する研究を行ふ爲めには日本人に隣接して居る諸人種の研究を正確に行はなければならぬ。之れには支那人、朝鮮人、南洋諸人種の外アイノ人を知悉するを要する。

言語風俗の上から見て現代アイノは三大派に

樺太アイノに關する人類學的探究紀行

區別する事が出来る。北海道アイノ、樺太アイノ、千島アイノが之である。北海道アイノに就ては東大の小金井博士の研究がある。古い時代に發表されたものだから今日の比較研究には不備の點もあるが廣汎にして正確なるものである。且其骨格は東大の解剖學教室に保存せられて居て必要に應じ補足研究出来る譯だから今日大して北海道アイノの骨格を集める必要を見無い。千島アイノは人口最寡少で將に絶滅せんとしつゝあるから至急骨格を蒐集する必要があるが孤島に散在して居る關係上此採集には非常なる勞力と非常な費用とを要する。

限られたる蒐集費と一月の暇とを以て最善の努力をやらうと覺悟した僕には樺太アイノは最手頃のものであつた。折りよく大正十二年に樺

太真岡病院長の鶴田善重氏が母校たる京大に歸省せられたるを幸とし同氏に詳細を話して助力を依頼した。同氏は大病病院長田上嘉藏氏と相談の上種々盡力せられた。僕等が大正十三年七月から八月に亙つて短日月中に申分無き成功を収めた得のは兩氏が一年前からの用意と樺太島廳警察部長城間恒人氏初め島廳諸氏の好意に負ふ所が多い。殊に田上氏が榮濱に同行して魯禮のアイノ墳墓を探究する間常に烈日の下に助力せられた勞苦は特筆に價する。唯本紀行中助手として京都から同行した渡邊君が渡樺一週間にして腸加答兒で臥床入院せられたのは残念であるが、太した事にならなかつたのは幸ひであつた。

元來未開地に於ける人類學的探求の方法には二種類ある。一は廣い場所を巡回し淺くとも廣い視察を遂げるのである。此種の人は世の中に多いから敢て僕はお仲間入をする必要が無い。第二種は最も適當な地を選定して狭くとも深い探求を遂げるのである。仕事の性質上僕には第

二種が必要である。

其處で僕は現代樺太アイノの出來るだけ純粹な骨格を集める爲めに魯禮(コレイ)を選んだ。樺太アイノは東海岸にも西海岸にも居るが多少北海道アイノ、日本人等の混血がある。然し西海岸の方が漁場の關係上北海道アイノの血を混する事が強いので北海道アイノとの體質上の差別を求める爲には西海岸を棄て、東海岸から材料を集めるのが至當である。東海岸でも餘りに北に行てポロナイ川の近くになるとギリアーク人、オロッコ人との混血が強くなる恐れがある。其點に於て樺太アイノの骨格を集めるには榮濱附近、若くは富内附近が至當である。然し後者は交通が不便で困るが前者は比較的便利である。榮濱の西北一里には有名なるアイノの大部落内淵(ナイプチ)がある。又北五里には白濱の大部落がある。然しアイノは風習上非常に死屍を厭ふので此等部落に行て骨格を集めたならば如何に喫驚するか分ら無い。其處で榮濱附近で目下無住の舊アイノ部落から骨格を採集しなければ

ならぬ。此困難な條件に適合した地が魯禮であつた。魯禮の地は榮濱を距ること東二里餘である。海岸沿ひの悪路を毎日往復するのは幾度か僕等をして行路難を嘆せしめた。然し天は僕等に幸して此地に於て五十餘體のアイノ骨格を蒐集し得しめた。而して金屬使用時代の樺太アイノ埋葬法につきて幾多の新知見を得せしめたのであつた。

金屬使用以前の樺太アイノ人骨を蒐集する目的で僕等は鈴谷川口のススヤ貝塚を發掘した大發掘の結果九體の石器時代人骨を獲た。發掘當初此貝塚を建設した者は樺太アイノでは無からうかと云ふ豫想の下に行つたのであつたが、發掘した人骨を見ると魯禮の樺太アイノ骨に非常に似て居るので確にアイノ人の手によつてススヤ貝塚は成たものであると確信出來た。されば樺太に於て確かな石器時代人骨を獲たのは僕等が初めであるし、ススヤ貝塚の遺物がアイノ人のものであると立證し得たのも僕等が初めである。

從て僕等の事業は二部に分れる。第一は魯禮に於ける金屬時代アイノ人の研究で、第二は鈴谷貝塚に於ける石器時代アイノ人の研究である。兩部門の正式報告を出すには可なり長い年月を要するから茲に通俗的に二三簡單な記述を試みやうと思ふ。其前に僕等の旅行日誌を興味中心に附加し度い。(京都帝國大學醫學部微生物學教室に於て)

第一 旅行日記

目 第二 樺太島榮濱郡榮濱村管禮に於ける金屬時代アイノの研究

次 第三 樺太島大泊郡千藏村北貝塚鈴谷貝塚の石器時代アイノの研究

第一 旅行 日誌

大正十三年七月七日(快晴) 渡邊君と午後八時五十分京都發急行列車にて東京に向ふ。暑さ甚だしく寢臺車中に蚊多くして眠成り難し。

七月八日(快晴) 午前九時東京驛着。四谷區信濃町の慶應大學醫學部に川上(漸)博士を訪ふ。不在。田口(勝太)博士と快談す。正午上野驛發

急行列車にて青森に向ふ。汽車は小山、宇都宮を經過して進む。關東平原の景色は單調である。雜木林と麥畑とがやたらに多い。白河驛のプラットホームの水道より出る水清冷水の如し。福島驛に及ぶ頃暮色迫る。東北の山川風物は何となく陰鬱である。夜風涼しくして爽快。關西地方の酷暑に經驗せざる所である。

七月九日(快晴) 寢て居る内に溫度が下つて曉の風が身にしみる。夏には有り難い國に來たなと思ふ。旭日が青森灣の彼方に上る。牧場が多い、月見草の花盛である。午前六時半青森着。連絡船が七時半に出る迄青森市をぶら付く、バラック式の粗末な家が多くて新開地の心地がする。津輕海峽波靜かで風涼し。慶應醫科大學の旅行班學生小林(六造)博士に引牽せられたるものと同舟す。正午函館着。

午後一時十五分急行列車にて函館發。沿道の囁目、大きな路が多い、野百合と野生菖蒲の花盛りだ。長萬部迄は内浦灣に沿って常に駒嶽を眺めながら走るが、其後山地に掛ると松杉が見え

なくなつて白樺落葉松之に代る。山の頂に白雪が残つて吹く風が冷たい。線路に沿って二子岩の露出が多い。幾内邊では石鏝の用石は殆んど二子岩に限られて居るが北海道では石鏝の二子岩製のものが少なく黒曜石製のものが多くのは變だなど思ふ。俱知安で日が暮れた。夜九時小樽着北海ホテルに泊る。

七月十日(快晴) 小樽市稻穂小學校の訓導五十嵐鐵氏に案内せられて市内の所謂古代文字の彫石を見せてもらう。色内町の大塚氏を訪て石環有孔磨製石斧等を見せてもらった。

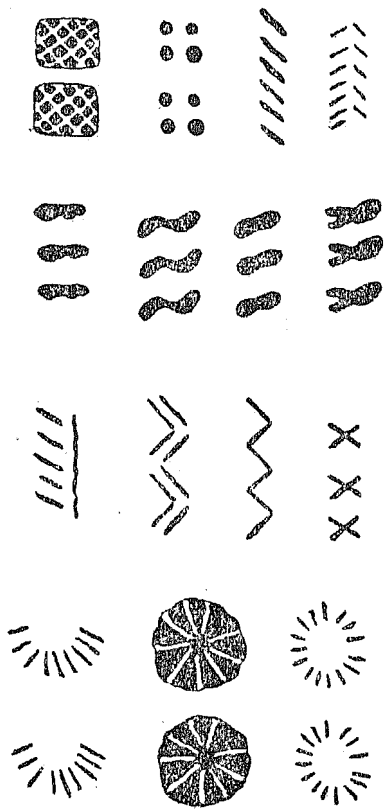
午後二時千歳丸で大泊に向ひ小樽發。北日本海の波靜かにして船は天鹽の山に沿って北行す。落陽遅々として午後八時を過ぎなければ黄昏とならない。甲板に遊んで居る女兒寒い寒いと云ふ。

七月十一日(快晴) 午前三時過西能登呂岬を左舷に眺む。亞庭灣の波僅かに立ち樺太の山我等を迎へる。午前九時大泊着。小汽船に索かれて空の圓平船が来る。荷物を積出すのかと思つた

ら船客に乗れと云ふ。人数は多くもないがぼつと出の樺太移民が多いと見えて埠頭は大混雑だ樺太へ来ると汽車の客車は荷物貨車の後に少し許りくつ付けられて居るし、町から外に出るには土砂を運ぶ荷馬車に土砂の代りに乗せられねばならぬし、人間と荷物は、大抵同格に取扱はる可きものなる事を初めて實地に教へ込まれる。

大泊廳立病院に行て院長田上氏に面會す。田上氏と大通の尾張屋呉服店に行て店主中島政人

氏所藏の土器石器を見せてもらう。同氏所藏品は主として大泊楠溪町の停車場近傍から出たものである。停車場の入口に立て見ると直ぐ東北の角に高さ五丈計りの臺地が来て終つて居る。土石器は此臺地上に家を建てたり畑を開いたりする時に出たものである。遺物は地表から地下一尺位迄に含まれて居る黒土の中から出る。恐らく住居跡で曾て此邊に竪穴が在つたものらしい。



石器は磨製石斧數點、錘石及砥石の外土器がある。磨製石斧の内では握りの部分を特に細くしたもの一點は面白い。樺太の錘石には内地の如く兩端打缺かれあるものは見當らぬ。不規則形な石を取つて其一部を加工して溝を造り此部を紐で縛るに便にしたものが通常である。

土器は褐色又は黒色の薄手で火力が弱い爲めに著しく脆い。

壺形鉢形のもが多くて形状の變化に乏しい。

中島氏は破片をも多數集めて居られるから紋様を知る事が出来る。紋様は通常縁部に沿ふて造られて居るが之れに壓し付け紋様と書き紋様とがある。壓附紋様は一定の形をしたものを土器の生乾きの時に壓し付けて凹みを造つたもので木の端か何かを一定の形に造つて壓し付けて線狀に並べたものらしい。書き紋様は篋の先きで簡単な形状を畫いて之を並列させたものである。中島氏藏品の主なるものを集めて圖示して見ると大體に於て前圖の如くである。

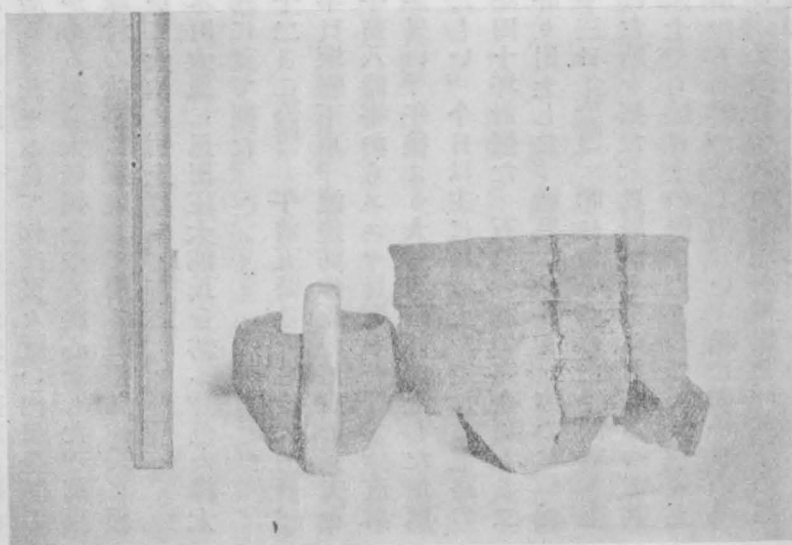
土器は脆くて碎れ易いに拘らず中島氏の手には三四個の完全土器があつた。其寫眞を乞ひ受けながら茲に掲載する。直徑三寸計の小形のものとみである。

以上の土器は南樺太の遺物包含層から出るものとして通常の品である。形状の簡單であること及土質の脆弱な點に於て土器製造術は進歩したもので無い。唯一定の形状のものを壓し付けて紋様を造ると云ふ考案は多少進んだ點がある

が美術上から云へば内地石器時代の自由な曲線紋様の方が遙に進んで居る。後述ススヤ貝塚やらソロヨフカ貝塚から出る土器も上記土器と大體に於て同種類のものである。但ススヤ貝塚からは組み紐を壓し附けて造つた模様やら禾本科植物たる麥の穂様ものを壓して附けた様な自然物利用の模様も稀に出る。兎に角此種土器は後述榮濱近傍の堅穴から出る拙劣な厚い内耳式土鍋よりは古い様に思はれる。

中島氏藏品一覽の上、田上氏と楠溪町停車場から乗車して貝塚停車場に下車した。停車場の南七八町の所にはソロヨフカ貝塚がある。停車場の北西半里の所にススヤ貝塚がある。兩貝塚共大泊に近いので好奇心に富んだ連中に絶えず荒されると思はれて大分いたんで居る。殊にソロヨフカ貝塚は開墾せられて畑となつて居るし行くに便利だし貝層も薄いので殆んど破壊された姿である。坪井博士の茲に來られた頃は種馬場が在つたらしいが今は無い。

ススヤ貝塚の方は面積も廣いし貝層も厚くて



諸所小發掘の跡を留めて居るが未だ雜草に覆はれて居る。此まゝにすれば又々近い内に全滅の恐れがあるから大發掘をやる決心をした。萬事を貝塚村の故事に通曉して居る渡邊祐作氏に頼み置いて大泊に引上げる。

夜本町大通に恩田庄太郎氏を訪ふ。色々樺太の石器に就て聞た。

七月十二日(快晴) 午前五時の汽車で大泊發、六時半貝塚驛下車、渡邊祐作氏の好意で人夫を整へ午前八時半からスヌヤ貝塚を發掘す。直射日光が暑い。午後より人骨第一號出土したが腐朽甚だしい。今日は主に貝塚上を走れる道路の東側を四十坪計掘た。石器骨器の完全なもの二十個許り出土した。結果は餘り良い方でない。

七月十三日(快晴) 昨日の場所と二十間計り南に離れた所を掘た。貝層が上下に兩層あつて其間に黒土やら焼け土の層が夾まつて居る。最上の貝層から石器が全く出ない。稀に硝子瓶の缺が出る。又鐵製ヤスの尖頭一個出た。其下の黒土及第二貝層から盛に土器破片やら石器が出る

地表下四尺の所迄掘り下げて斷層を造りつゝ掘り進む。熊の骨と犬の頭骨が多數出る。アイノには犬が必要物だからスヌヤ貝塚の住民は樺太アイノでは無いかと思ふ。石器は三十個計り出た。


七月十四日(曇) スヌヤ貝塚の發掘を中止して置いて午前六時發汽車で豊原に出發す。同行者田上及渡邊兩氏。九時豊原着。島廳に警察部長兼柘植部長城間氏を訪てアイノ人の件に就て懇談す。

終て島廳の産業陳列所へ行く。アイノの土俗品の外に土器石器の陳列があるが産地不明のもの多いのは惜む可きである。出陳の東海岸真岡附近發見土器片には繩紋のあるもの少なく無いのは注目價する。東海岸には繩紋土器は非常に稀である。其他真岡附近發見の大土器片に北海道小樽邊から發見する様な曲線紋様あるものがある。立派な石斧砥が一つある。鯨骨製斧が二つあつて出所不明だからオロッコ人のものでは無いかと疑ふたが、後にスヌヤ貝塚を發掘し

て僕は類品數點を發見したからやはり樺太アイノの石器時代のものである事が分つた。

豊原病院に若杉院長を訪て近時豊原市街の道路加修工事中に發見せられた歐洲人の頭蓋骨一個を頂戴した。丸い頭である。ポーランド邊の者で無いかと思ふ。鳥廳から病院に行く道路は水道布設の爲め掘り返して居る。磨製石斧一個をひらつた。河床に在たものと見えて角が丸くなつて居る。

午後五時半豊原發、汽車で榮濱に向ふ。荒涼たる樺太の原始林や身の丈けを没する雜草の野が續く、人家が稀で淋しい。線路の兩側山火事多くして未だ煙が出て居る。自然は斯くして破壊し斯くして建設しつゝあるのかと思ふ。

朝から雲行ききの怪かつた空は落合驛に近づく頃に雨となつた。八時半榮濱着紅葉館に宿る。七月十五日(終日雨) 巡查部長瀬尾尾次郎氏の紹介で木村の土中より開墾の時に發見した壺形土器と磨製石斧を見る。土器は  形で無紋様、厚い粗末な焼きである。下記内耳式鍋と同

種類のものと思ふ。榮濱村長大橋忠夫氏の訪問を受けて村役場に保存せられた土器石器の破片を見る。内耳土鍋の破片と磨製石斧がある位のものだ。榮濱小學校長鳥谷部凌氏は斯道に心得ある人だから小學校に訪ふ。石斧砥やら石斧やらの此近傍の堅穴、遺物包含地から發見された遺物を見せてもらつた。學校を距る數町の鐵道線路に沿へる斷崖に案内されて來た。地表下數寸の厚さに黒土がある、此土中から石斧等が多數出た由。石斧の折れや土器片がある、堅穴の内耳式土器の種類で厚い無紋様のものである。

正午旅舎に歸る。榮濱は鐵道の終點で、北の方オホーツク海に面せる四五十戸の村落である。北方ポロナイ川口に在る敷香行の汽船が發着するので旅舎が多い。紅葉館主は醫者で西洋風の心地宜い家である。座敷から眺めると荒涼たる曲浦が西北に連なり樺太の脊骨を成せる山々が眼も遙かに走る。景色は好いが胡砂吹く風の荒い淋しい所だ。此邊一帶の丘上には無數の堅穴がある。旅舎の庭の一隅にも直徑一間餘の小

さい堅穴が三個ある。此旅舎を建設する時發見した内耳式土鍋の破片をもちつた。破片から案ずると内耳ある土鍋には通常相對した所に一對の紐通し用の耳が附て居る。鍋に紐を掛けて火につるす時に焼け切れない爲に耳を内側に付けたものである。

雨が降て寒い。三人爲す所も無くして閑居す瓦斯が深く閉して陰鬱である。獨逸で暮した秋雨の日を思ひ出す。

七月十六日 終日雨で寒い。昨夜東大農學部の本多(靜六)博士が同宿、早朝雨を犯して演習林へ行かれた。午前中榮濱小學校へ行つた。榮濱が祭禮で運動會をやること云ふので白濱の青年アイノが二十餘名伊藤教員に引率されて來て居る好機だから寫眞に寫した。大正十年統治の必要上榮濱から北五里の白濱に此附近のアイノを移した。彼等には大不平である。農耕の地をあてがわれたが自然民たる彼等は之を欲し無いし、海魚を漁るには彼等の漁具は餘りに小さく且不完全である。智に乏しいアイノ族は肺結核と花

柳病で年々絶滅に瀕しつつある。

小學校で本村の青年團長小林吾七氏から下の如き重要な話を聞いた。「大正六年榮濱停車場から東へ向つて數町の長さの汽車のレールを布設した。之は港より上げた石炭を鐵道へ運ぶ爲の側線である。其土工中に人骨が發見せられた。

其地名は舊名ドブキで新名柏濱と云ふ。海岸を距る二三町の平坦な草原である。地下二尺の所より人骨出た、人骨は半ば腐朽して居つたが人骨と一所に石斧、石鏃と飾玉が出た。飾玉は青石と赤石から出來て居て丸形のものど長形のものがあつた。同時に寛永通寶が十二三枚出た。此寛永通寶は一文銭が多かつたが裏に波形ある折二錢も交へて居た」と云ふ。此話は重要である。小林氏はわざ／＼僕等を現場に案内されて此處から人骨が出たと云ふ。前後の模様から考へ合せて恐らく誤無いものらしい。此事實を正しいとすると樺太アイノは寛永通寶の通用した時代迄石器を使用したものらしい。唯寛永通寶は各地で種々の年代に鑄造されたものだけ

ら實物を見度いと思つたが散逸して手に入らなかつたのは残念千萬である。

後述魯禮のアイノ墓地からは常にガラス玉計り出て來た、然しススヤ貝塚第一號骨は黒色石炭飾玉を所持して居つた、白濱部落の現存アイノ老婆の二名は大切に石飾玉を所持して居る相だ。前述の發掘品と等しいから僕は是非譲つていたゞき度いと乞ふた。然し自分の死んだ時死屍と一所に埋めてもらうのだと云つて呉れなかつた。

雨と霧に絶ず苦められながら僕等は榮濱で忍耐して暮した。

七月十七日 朝起きると復霧と雨なので落膽して居た所午前九時に晴模様となつたので急に魯禮に向て出發する。馬は遅ましいが土砂運般用の荷車である。榮濱から海岸の丘麓傳ひに三里行く、北には遙かに北海が連なつて居る。山百合のオレンジ色の花、白い花、赤い漬梨の花の咲いて居るのは誠に美麗だが丈なす雜草に覆はれた路をゆられながら通ると腰がだるく尻が痛

む。行路難と云ふ言葉がしみじみ思ひ出される二時間を費して魯禮に到達した。

遠淺の岩礁の多い淋しい海岸である。オホーツク海の白波が絶えず寄せてはくだけ、時折り海豹の頭が波間に見える波打際に近く日本人の經營せる中島漁場がある。蠅が無暗に多い。漁場小屋の直ぐ後は高さ四五丈の高臺地である。此臺地には夏草の間にアイノの廢屋、荒れた倉庫が淋しく立つ。大正十年以來白濱に移されたが毎年春の漁期だけは白濱から歸つて來る物悲しい廢部落だ。

雜草を壓し分けて墓地らしい所は無いかと捜し廻る。其れと思はれる所を掘て見たが何も出て來ない。腹が減たので中食した。雜草の中を再び泳ぎ廻り澤を越えてふと熊祭した所へ出た木の枝をけづつて造つたイナオが立て居る、祭神の榊に相當するものである。木の枝に犬の頭骨と下顎骨を突きさした變なものが立て居る。アイノに病人が出來た時占卜して犬を殺し肉を食て祭つたものである。

大に閉口してしまつた。漁場の若い衆が草を茹て居たのでアイノの骨の出る處を聞たら直ぐに分つた。時に午後三時である。後文第二丘の頂上に登る。草原の間に長方形に凹んだ處がある。草根を取り除くと直ちに四肢骨が現はれる。四肢骨が腐朽しても頭骨は完全である事が多い。第一號人骨より第五號人骨迄發見。午後五時魯禮發、暮色迫る頃に榮濱着、天はからりと晴れ渡つた。

七月十八日(快晴) 樺太で多いものは材木と雜草とゴケ(白首の方言)とデメン(勞働者)と犬と蠅と毒虫と魚である。此内ゴケと犬と魚と材木とは僕等に關係が無い。然し烈日の直射は非常に紫外光線に富むと見えて顔も手も忽ち黒ん坊の様に燒ける。僕等も正に立派なデメンに仕立上げられた。唯雜草と蠅と毒虫とに至つては閉口の外は無い。丈成す雜草の間にもぐり込むと有らゆる昆虫が人を刺す様な氣がする。群を成して蚊が居る小さな糠蚊が居る各種の「あぶ」が居る中等大の蟻が居る強烈な「だに」が居る。

身體の有らゆる部分を絶えず動かして居らない限り常に身體のごこかが痛いか又はかゆい、おまけに蠅が無數である。ちつとして休む事が出来ない爲めに疲れはて、しまうのだ。

然しかうなつては掘るより外仕方が無い。午前十時魯禮に着、第六號より第十五號迄出土した。午後曇て雨が降て來た。漁場主中島成一氏の御厄介になつて雨宿りした。三時半出發榮濱に歸る。夜に至て大に雨降る。今夕より渡邊君發熱。腸加答兒にて臥床す。遂に僕が樺太を去る迄働け無くなつたのみならず、衰弱を恢復する爲めに樺太に残して僕一人引上げねばならなくなつたのは残念である。

七月十九日(午前晴午後曇る) 榮濱小學校長島屋部氏同行補助す可しとの事にて田上氏と三人同行、九時魯禮に着す。途中海濱の砂取り場でアイノ骨一體掘り出されて居た。偶然の獲物として採集す(第十六號骨)。此日僕は手と頸とを毒虫に刺されて大に腫れ上つた。第十七號骨から第二十九號骨迄を發見した。今日の人骨は割

合に新鮮で木棺の腐朽せざるものが多かったから埋葬状態に就て大に學ぶことが多かった。内七個には木製墓標があつた。第二十九號は非常に臭くて嘔吐し相になつた。人骨が多く馬車一杯になつたので歸途は歩行した。

七月二十日(晴天) 午前九時半魯禮着。直射日光熱し。第三十號より第三十七號迄發掘。今日は暑い爲と田上君一名の助勢だつたので前日の如く仕事が進行しなかつた。

七月二十一日(快晴) 樺太でも馬鹿にならぬ暑さである。今日は土用入に當る。疲れたので發掘を中止して荷造りし麥酒箱十一個として直ちに發送す。

七月二十二日(曇) 田上氏と魯禮に午前九時着涼しくして爽快である。第三十八號より第四十六號迄發掘したが、第二丘にはもう掘るべき部分が無くなつた。午後第三丘に移つた。茲は古いと見えて諸所に凹みがあるが人骨は腐朽して役に立たない。第四十七號からは三本の日本刀第四十八號からは八本の日本刀、第四十九號か

らは内耳式土鍋を副葬品として出した。土器が副葬品として出たのは之れが初めてである。其他は全部木器か金屬器又は硝子が出るのみである。此他三穴を掘たが副葬品も人骨もないから番號を附するのを止めた。最後に東丘に移て第五十號から第五十二號迄人骨を掘た。此處の或場所から犬骨のみを出す。魯禮の發掘も思はし



A
B
い所が無くなつたので今日で止めた。内耳土器鍋の形式には圖の如く二種ある。Aは上記の副葬品でBは榮濱の

堅穴から獲た破片である。

七月二十三日(快晴) 内淵(チイブチ)は古來有名な樺太アイノの大部落であつたが大正十年以來住民の大部分は白濱に移された。然し魯禮と異つて内淵河口に位し鱒鮭の溯江するものが多いのでアイノは戀々として歸來し廢村とは成ら

ないのである。榮濱から内淵迄一里、魯禮と反對の方向に海濱に沿って進む。今日は宿の主人と田上氏と共に同伴した。

道は海岸に沿ふた平坦な高まりを進む。砂地で雑草も低いし乾燥して虫が少ない。途上到處に無数の堅穴がある。個々散在し或は群を成す。小なるもの直徑一間、大なるもの直徑七八間で深さ一間に及ぶ。圓きあり橢圓形あり四角のものあり、穴の周圍は掘り上げられた土で少し堤狀に高まつて居る。恐らく此邊許多の石器土器が発見せられるだらう。然し樺太では之を持って居る者が少ない。草根が之を覆て採集し得られないからだ。將來開墾せられるのを待つより外は無からうと思ふ。

内淵川は幅廣くして河水が満々と流れて居る日は輝いて吹く風涼し。川に沿て數軒のアイノ小屋と住民が居る。北海道アイノで物識りと云はれる教育のある人々の家を探ねて樺太アイノと北海道アイノと如何に異なるかと問ふ。「樺太アイノと北海道アイノとは言葉が餘ほど異つて

居るが樺太の古い物語は古語で述べられて居る此古語はよほど北海道と共通の所がある、北海道でも北見宗谷のアイノ方言は樺太アイノの言葉と似て居る。風俗も大分異う又樺太アイノは北海道アイノほど毛深く無く眉間高く無く身體小さく骨格弱い」と云ふ。魯禮の樺太アイノ人骨で見ても北海道アイノ人骨とは餘ほど異つて居る。

内淵川の邊に出る。アイノが來て網で鱒を漁て居る。アイノの造つた獨木舟がある。先日榮濱小學校で會つたアイノ青年の一人に會ふ。此人は軍人で勳章も持て居る。鱒は一匹十錢だが鹽代と手間とで五錢引去られるので實價が五錢だと云ふ。漁る魚は次第に減少してアイノは正に生活難に陥りつゝある。アイノは單純な正直な民である。此民に對する周圍日本人の態度は反省に値するものがある様だ。排日を憤る前に日本人は心してアイノの訴と不平とに耳を傾ける必要がある。今日樺太に於ける千二百人のアイノは適應性に乏しい爲め、近い内に日本人と

混血してしまふか、又は絶滅するの運命を持って居る。

アイノの小さな單純な網は、之を張て引上げる迄に三十分かゝらぬ。其れにも拘らず數匹の鱒は必ず一網に入る。自然の民は漁を遊戯と感ずると見えて嬉々として喜んで居る。網の錘は自然石を強く糸で縛つたもので石器時代に於けるが如く石に加工して無い。又彼等は堅穴（トレンチ）の住民が誰れだつたか忘れて居る。

アイノから買つた鱒を河岸の落葉松下で焼いて中食す。此處の舊墓地は木標が三本立て居る外耕地となつて人骨の所在不明である。海岸の新墓地に行て見ると木標のあるもの三つの外、佛式に法名を書いた卒塔婆がある。アイノのハイカラなるものだと思つた。午後四時に歸る。

七月二十四日（晴天） 殘部を荷造りす。五箱となつた。渡邊君が中々治せぬ。明日から大泊病院に移さうと思ふ。

七月二十五日 午前六時半榮濱發同九時豊原に着。渡邊君には田上氏附添大泊病院に直行する

事とし余一人のみ下車す。鳥廳に城間部長を訪ひ謝辭を述べた林務課長安藤一次氏から本島發見の石斧、石鏃類十個を戴き、午食を廳食堂にて御馳走になる。豊原病院を訪て分れを告げ午後二時半豊原發、午後四時貝塚下車、渡邊祐作氏方に宿る。スヌヤ貝塚再度の發掘の爲である。

夕刻西南七町を距つるソロヨフカ貝塚に行て表面採集す。石器十一個を得た。此貝塚は今日畑となつて居るが面積は約一町歩以上に及ぶらしい。然し貝殻の存在は多く無い今日から僕一人となつた。宿の窓から暮れ行く野山を見渡すと獨逸シユワルツワルドの田舎屋に宿つた氣分になる。

七月二十六日（晴天） 午前八時から前二日に掘た中間部を掘つた。石器骨器約三十點出土す。

七月二十七日 雨天なので發掘を中止し早朝大泊病院に渡邊君を見舞ふ。下熱して快方である寫真屋の暗室を借りて樺太渡航以來寫したカビネ板五打を現象す、眞岡より鶴田院長來られ、

夕刻大泊病院の諸氏と會食した。夜九時終列車で貝塚に歸る。

七月二十八日(晴天) 午前八時から十三日發掘地域の南側を掘る。意外にも人骨が三體(第二號より第四號迄)出た。第四號には副葬品がある。石器骨器は二十個計りより出無かつた。

七月二十九日(晴天) 道路から西側の發掘に移つた。石器骨器約三十點を得た。午後四時に切り上げてソロヨフカ貝塚を表面採集し石器二十個計を得た。

七月三十日(晴天) 昨日の掘り續きを進んで人骨四體を獲た。石器類は二十五個計を得たのみである。

七月三十一日(晴天) 更らに昨日の掘り續きを發掘したが石器類二十個計り出たのみで思はしく無い。スヌヤ貝塚の見込みある場所は大體發掘を了したから之れで打切る事とした。

午後ソロヨフカ貝塚の表面採集を行つて石器十五個を採集した。發掘物を荷造してビール箱五箱となる午後から曇て寒くなつた。

八月一日 曇天で霧深く寒い。樺太で寒くなる。天氣が悪くなる。ソロヨフカ貝塚を表面採集したが石器數點を得たのみである。午後から南貝塚に長谷山竹藏氏を訪ふ。兩三年前此處の丘上から發掘した完全な頭蓋骨を一個頂戴す。日本刀を傍にして四肢骨もあつた相である。金屬期の樺太アイノ骨たる事疑無い。

八月二日 今日樺太を去る豫定だつたのに昨夜大暴風で雨を降らす。霧の深い北海は魔の海である。去る二十七日夜小樽通ひの大禮丸が能登呂沖で濃霧の爲衝突沈没して百餘名死んだ矢先きである。一汽船延ばした方が宜いと考へ原稿用紙を買つて貝塚に歸る。渡邊君大に快方である。

八月三日(快晴) 天はカラリと晴れた。昨夜來勉強して此の發掘記事を書いた。午後疲れたからソロヨフカ貝塚に散歩し石器二個を得て歸る。

八月四日 午前十一時大泊に出で稚内行連絡汽船の切符を買ひ大泊病院に渡邊君を訪ふ。全快

して居るが内地は暑いから樺太で暫く静養する様に勤めた。田上氏等に送られて午後八時稚内行連絡船壹岐丸に乗る。偶然東大の脇水理學博士と同船したのは幸であつた。夜十時出航。夜半から霧がかゝつたと見えて汽笛を鳴らすので安眠し難かつた。先月二十七日大禮丸が霧中で衝突沈没し百餘名溺死した邊なので乗り心地は好く無い。

八月五日(晴) 曉天遙かに北海道の山影を望む午前七時稚内着。稚内から名寄迄は未開墾の地が多い。海岸に沿つた草原には堅穴らしいものが見える。音威子府で脇水博士は下車された。昨夜來同船同車中に専門の土壤林相についてお話を承つて有益だつた。夜九時札幌着中村屋に宿る。

八月六日(快晴) 北海道は昨今近年に無い暑氣だと云ふ。成る程暑い。南二丁目アイノの土俗品發賣店一行で買物した。鬚篋(イクバシイ)の彫刻が面白いので儀式の時に使用する太刀の木製模型(チクニポニイコロ)と共に五十種類、

許り買ひ込んだ。スヌヤ貝塚で發見した銛先きを取り付ける骨製器具の類品を日高アイノが使用して居るのが分つたので之れも買入れた。ローのアイノ墳墓から木製の鋒形のものが出た。模型だとは思つたが何だかハツキリ分らなかつたが此店に來て鐵鋒の實物を獲た。いづれも發賣する爲めに造られた新品で無くて、永く使用された古色ある土俗品である。

北海道大學醫學部に今博士を訪ふた。新設大學なので清潔で心地好い。今氏の私宅で同氏の集められたアイノのアツシ模様の蒐集を見せてもらつた。近い内に出版されるつもりらしい。亡び行くアイノの風俗を永遠に傳へるのは日本人の急務だと思ふ。同氏宅で晝飯を頂戴し自動車で市中を案内してもらつた。札幌は米國に來た心地のする町である。

植物園内の大學陳列室を觀る。階上にはアイノ土俗品の外に出土古器物がある。土器には中々良いものがある。形から云つても模様から云つても北海道石器時代土器は東北地方の石器時

代土器と同一系統のものである。然し焼きは北海道の方が弱いので脆く碎れ易い。模様も彫状も東北地方の土器の方が進歩して居る。樺太でもさうだが土器の使用の末期と思はれるものは紋様は退化して簡單なつゞき紋様となり直線模様又は並列紋様が使用されたらしい。然し此等土器の時代的新舊の差は今日未だ確には分らない。地層を精査しつゝ將來發掘しなければ成るまい。いづれにしても北海道大學に人類學教室か考古學教室を興す必要がある。

驚いた事には巖手形の直刀が網走から發見せられて此陳列館に歴然と存在して居る事である。此式の直刀は東北地方の古墳から往々發見されるが網走と云へば北海道の北端で千島に近い處である。奈良朝末の文化が網走に及んで居た事は餘ほど考へなければならぬ問題である。其れと共に記すべきは次日僕の小樽地方の踏査結果として彌生式土器が或は將來北海道で發見されはしまいかとの豫想を抱かした事である。いづれにしても北海道を新開地と思ふのはどうや

ら誤つて居るらしい。よほど古くから此地には住民があつたのだ、そして近世に至る迄石器時代だつたらしい。樺太も恐らくさうだらう。此永い年月の間に如何なる文化の變遷が此地に在つたか年代的には分つて居無い。一派論者の云ふ如くアイノが日本人に南から追はれて北海道へ來たと云ふ様に簡單なものなるや否や疑はしい。然も此考察はアイノと日本人との人種的關係を論ずる上に是非必要なことである。

其他此陳列室の骨器類は北海道北部から發見したものであるが參考に資すべきものが多い。夕飯は北海道醫大の今、有馬、宮崎、山崎、中村、氏等に御馳走になつた。席上高等學校以來の同期生たる野村巖君に久々で會つたのは非常に愉快だつた。

八月七日(快晴) 午前九時小樽着。入船町の福田道具店で可成り大きな石器時代蒐集品をまとめて買入れた。北海道及樺太出土品で數百個の石器石器から成て居る。之れで此蒐集の散逸は防げた。同市在住五十嵐氏に案内されて

余市町に行く。蘭島から余市へ掛けて遺跡が多い。之れは寺田氏が既に考古學會雜誌に報告されて居る。唯寺田氏が目下小樽高商から海外留學中なので不在であるのが残念である。

余市の地勢は樺太の内淵に似て居る。海の幸多くして多數の住民が居つたのは怪むに足らぬ。曾て此邊の平地は内淵に於けるが如く多數の竪穴で埋められて居たのだらうが今日は殆んど残す所無く開墾された。遺物も曾ては非常に多く出土したらしいが今日はもう少なくなつたらしい。山上に残れるチャシの石材の如きも盛に庭石に使用されて壊されつゝある。一向古跡保存は行はれて居らぬらしい。要するに僕等は破壊された遺跡を見物に行き昔をしのぐに過ぎぬ。午後十時小樽より汽船に乗て函館に向ふ。八月八日(快晴)連絡船で津軽海峡を渡る。正午青森着。樺太の涼しさになれた身には暑さが強い。數日前開通した羽越線により東京を經過する事無く京都へ直行する事に決心す。午後青森市中散歩。古道具屋で數點石器時代遺物を探し

當てた午後十時乗車。暑いが疲勞して眠る。八月九日(快晴)朝羽前と越後の國境を過ぐ。景色が良いがトンネルが多い。新津高田を経て親不知に至る頃日が暮れた。日本海の日没は雄大である。此列車には食堂車が無いのが不便だ。又裏日本は生活程度が劣つて居る爲めに設備に缺けた事が多い。然し東京に用事が無い場合に京阪地方から青森に行くには便利な列車である。

福井から急行となる。暑いが汽車中で第二夜を送る。

八月十日(快晴)早朝京都に歸る。

圖版第十 樺太島築濱村宇魯禮に於ける

第二十七號アイノ墳墓 (口繪解説)

木棺の形式は本文甲に屬す。人骨頭蓋の右側に在るは漆器(日本製盆)にして胸上に在るは木製矢入なり。其の下に大刀と木製煙管入れとを横ふ。人骨は腐朽せる所にて覆はれ居りしにより四肢骨の位置は明かならず。